

朝日

歌壇 俳壇



〈日曜日のブローチ 28〉 junaida

◆大串 章 選

獺祭忌八十路まで生き存へて

一村の灯もなき月明り

(茨城県阿見町) 鬼形のふゆき

星月夜高原列車の通過音

(横浜市) 前田なみき

ちちろ鳴く朝の宇宙にひたりけり

(輪島市) 國田 欽也

文系も理系も仰げけふの月

(長崎市) 下道 信雄

時雨忌や学ぶべきと常にあり

(八王子市) 徳永 松雄

京言葉遣りし鄙の走り蕎麦

(伊万里市) 萩原 豊彦

名目を酒の肴に酌み交はす

(岡崎市) 加藤 幸男

青空の奥に青空鳥わたる

(新座市) 丸山 敏子

ふるさとは五右衛門風呂に虫の声

(岡崎市) 金丸 智子

【評】第1句。短命の子規を偲び、八十路の自らを顧みる。獺祭忌は正岡子規の忌日。第2句。村の灯火は全て消え、月が明るく輝いている。第3句。昭和のヒット曲「高原列車は行く」(唄：岡本敦郎、作曲：古関裕而、作詞：丘灯至夫)を思ふ。

◆高山れおな選

台風が目が三つある海の色

(東京都板橋区) 竹内宗一郎

小牡鹿に無防備の首差しだされ

(福山市) 高垣 光利

新宿に群れなす孤獨いし雲

(横浜市) 廣澤 行紀

少女らのおつまみはグミ冬に入る

(東京都板橋区) 牧田 涼子

妻逝きし窓より秋の朝日射す

(高松市) 島田 章平

花は愛大地の愛や秋の花

(新宮市) 中西 洋

神主の杵のつややか秋祭

(厚木市) 矢下 育子

雨兆す御殿場線や稲架の列

(神奈川県大磯町) 前田 恵美

銀鱈のやうな月光を浴ぶ五体

(名古屋市中区) 三高 邦子

そぞろ寒取つてしまへと外科医の言

(矢板市) 菊地 壽一

【評】竹内さん。台風が同時に三つも発生。まだ影響はないが気になる。高垣さん。人馴れした鹿の感じが出ている。人の側の戸惑いも。廣澤さん。他の街でもいいはずだが新宿がやはりベストか。福永耕二に〈新宿ははるかなる墓碑島渡る〉。

俳句時評 帰還せざる兵士の句

岸本 尚毅

栗林浩「還つて来なかつた兵士たちの絶唱」(角川書店)は「戦後八十年」の節目に、戦時下の俳句の様相を描出する。

〈出撃や特攻日和の聲 岡安明〉は一九四五年四月に「沖縄西方洋上」で戦死した二十三歳の特攻兵の作。沖縄には四月に鳴く蟬がいる。

〈薬瓶に柳絮舞ひ入る二度目かな 山本北溟〉は一九五四年にシベリヤで病死した抑留者の最期の作。「柳絮」とは風にのって飛ぶ柳の絮だ。

〈月光とあり死ぬならばシベリヤで〉は戦後の俳壇で活躍した佐藤鬼房の作。鬼房は南方で捕虜となったが、病気のため労役が免除され病院船で復員。その鬼房が「死ぬならばシベリヤ」と詠んだことを、栗林は「自分よりも厳しい環境に投げ込まれ死んでいった多くのシベリヤ抑留者への申し訳なき、慟念の念」と解釈する。

〈汝等老いたり虹に頭上げぬ山羊なるか〉は、あなた方は老いた、虹がかかったか、という意味。「時局」に迎合的だった当時の俳壇幹部に憤激をぶつけた句だ。この句を詠んだ中村草田男を含む俳壇の「厭戦者」たちに対し、特高警察の協力者すなわち思想の弾圧者として立ち回った小野無子という俳人がいる。本書はこの俳人にも一章をあてる。

本書は四章から成り、各章はそれぞれ戦没、抑留、帰還、思想統制を対象とする。戦時下の俳句という事象を広い視野で捉えており、逆にいえば、俳句を通して戦争の一面をうかがわせる作品だともいえる。

林桂句集「遠近紀行」 第10句集。2017年から24年までの394句を収録。未発表作品も含む。「太古より日輪速き重かな」「大き鏡に向かひて夢む秋の暮」(ウエップ・2970円) 夏井いつき著「NHK俳句 夏井いつきの『凡人俳句』からの脱出」 「NHK俳句」への投稿句を解剖し、発想と推敲の秘訣を公開する実践作句指南書。(NHK出版・1650円)

風信

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿でき

◆小林 貴子 選

石叩知己の如くにふるまへり

(倉吉市) 尾崎 雄雄

名月やだんだん近くなるやうな

(高砂市) 富田 卓

死顔は見ると友と新酒酌む

(水戸市) 加藤不よういち

「新色ですよ」釣られて秋を買ふ

(草津市) 佃 恵美子

鉦叩数にきまりはないらし

(飯能市) 細田 裡子

サーモンもビーフも燻し秋日和

(千葉市) 宮城 治

遠足に来たのと子らは鹿に告げ

(京田辺市) 大島 智雄

てけてとキター初心者秋夕

(藤沢市) 原島 吉光

銀杏をラジオペンチで割って喰う

(川崎市) 雪本 純一

括りても縛りてもなほ秋乱れ

(姫路市) 橋本 正幸

【評】一句目、石叩は鳥のセキレイの別名。駐車場を小走りしていたりと、人に親しい。二句目、見続けているうちに存在感が増してくる。三句目、ご同輩。私も死顔は見られたくない。四句目、口紅など、今季の新色と言われてつい購入する。

◆長谷川 耀 選

天地の別れしとき露の玉

(東京都文京区) 大塚 俊子

台風は太平洋で茹で上がり

(南房総市) 山根 徳一

白桃を肘まで濡らし吸りけり

(我孫子市) 藤崎 幸恵

花のよなカマキリのゐて道塞ぐ

(さぬき市) 鈴木 幸江

半世紀妻とかくある秋思かな

(袖ヶ浦市) 浜野まさる

新涼や外科医のやうに手を洗ふ

(横浜市) 齋藤 洋

黄金虫息をしてゐるエメラルド

(越谷市) 安居院半樹

火の国は畔も麓も曼珠沙華

(長崎県波佐見町) 川辺 酸模

手に句帳春夏秋冬天高し

(長崎市) 下道 信雄

太極拳まづ団栗を掃きにけり

(行田市) 吉田 春代

【評】一席。天と地の別れ涙か。一粒の露の秘める壮大な神話。二席。真っ赤な茹で蛸のような台風。むら雲の足をはばらせて。三席。甘いはずが手首から肘へ。秋の好きな人である。十句目。転ばぬ先の筈。周到の心構えこそ太極拳の極意？